

明石工業高等専門学校図書館

図書館報

第42号 平成18年12月

目次

2006夏 白洲次郎の世界・・・	(1)
郷土資料ガイド(3)・・・	(2)
私と読書・・・	(3)
自著紹介、学生の声・・・	(4)
図書館と私・・・	(6)
読書感想文コンクール・・・	(7)
推薦図書・・・	(11)
利用統計、利用案内・・・	(12)
海外の図書館・・・	(14)

2006夏 白洲次郎の世界

高 久晴

久しぶりに書店に入ると、白洲次郎関係の本が何冊も集められたコーナーが出来ていて「今、この人が人気なのか？」と何冊か購入する。兵庫県に生まれ、生涯にわたり「プリンシプル(原則)」を大事にし、戦後日本の進路に大きな影響を及ぼした男の行動録である。

近年、社会的責任を無視するかのような企業や個人の犯罪が多数露見し、日本全体がルール無き弱肉強食社会に変貌してしまったかのような観を呈しているのは、改革の名の下にあらゆる分野で見直しが行われて競争が激化したことにも大きな原因があると考えていた。しかし、本書を読むと外務省の体質、マスコミの報道姿勢、政治家の考え方、民主主義の成熟度など現在問題となっていることに対し、白洲が戦後10年も経たない時期に怒りの声をあげており、問題の根の深さをあらためて実感できる。と同時に、20年前に亡くなったこの人物の言動が今なお見直されているのは、熱に浮かされず、日本人としての矜持を保ちたいとの願いや、第二の白洲待望が多くの人にあるからであろうか。圧巻は、GHQの絶対的な権力の前に新憲法を受け入れざるを得なかった日本政府の苦渋の場であり、その改正問題が今なお、かまびすしく争点となっている理由がよく理解できる。近代、とりわけ戦後史に対する無知と、人間教育の重要性を感じさせた夏であった。



『明治維新前までの武士階級等は、総ての言動は本能的にプリンシプルによらなければならないという教育を徹底的にたたきこまれたものらしい。我々日本人の日常は、プリンシプル不在の言動の連続であるように思われる。』

(たか きゅうせい 校長)

「プリンシプルのない日本」 白洲次郎著
 新潮社 1943年 ISBN4-10-128871-2
 請求記号:304.0.S 登録番号:099955

和紙が伝えた幕末の村社会

ひめじりょうか こく んしの べく みびんごむらごにんぐみおあらためちょう 「姫路領加古郡新野辺組備後村五人組御改帳」

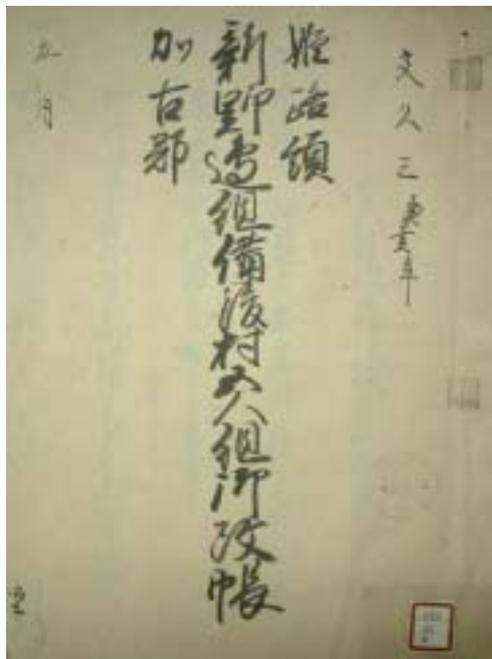
長谷川 博史

たとえば、今から100年も200年も前に、この辺りにはどんな人がどのように住んでいたのか。そんな素朴な疑問に答えてくれる手がかりが、郷土資料室にも残されている。

加古川市に備後という所がある。本校から明姫幹線を西へ約10km、鶴林寺を過ぎて、加古川を渡る手前辺りに位置している。加古川中学校の所在地である。

文久3年(1863)9月の「姫路領加古郡新野辺組備後村五人組御改帳」には、当時の加古郡備後村の住民37家族、総計129名の名前・続柄・年齢などが記されている。各家族の人数は最大でも8人であり、平均して3.48人。公文書に現れる家族形態がそのまま実態を示すとは言いきれないが、おおよその様子を知ることができる。家庭事情は様々で、22才の「りん」や15才の「とき」などは、それぞれ一人家族として登録されている。この後まもなく、「源右衛門」の11才になる子息「米蔵」や、「とま」の4才の娘「たけ」が病死しているように、子供の死亡率が高いことも窺い知ることができる。奥さんの出身地も重要な情報の一つで、親戚付き合いの範囲を知ることができるが、同じ加古郡内、特に同じ備後村内が大半を占めている。明石郡の山下村(現在の明石市中心部)・大蔵谷村、飾西郡の下手野村(姫路市の西部)、加東郡の西村(小野市河合西町)が最も遠い事例で、通婚圏はこの程度の範囲内であったようである。

「五人組」は、江戸時代に全国で実施されていた制度で、近隣の5家を1組として、相互協力と相互監視を連帯責任で行なわせる組織であり、村人全てがこれに属することを義務づけられていた。「五人組御改帳(五人組帳)」は、五人組が遵守すべき法令を周知徹底させるために、庄屋が村民に読み聞かせ、五人組頭が捺印して誓約した帳簿である。文久3年の備後村の場合には、17ヶ条に及ぶ条文が記されている。その内容は、住民の登録



義務、不審者の通報義務、外来者への宿貸し禁止、盗賊や火事への対処義務、村外へ出かける際の届出義務、賭博の禁止、親不孝の戒めなどである。五人組帳に関する研究は古くから存在し、江戸幕府体制の管理の厳しさを示すものと評価されてきた。最近では、環境面や社会関係の側面から江戸時代を肯定的に再評価する考え方も定着しつつあるが、現代人からみれば、規制の多い窮屈な生活であったことは否定できない。

ところで、実際にこの文書を手にとってみると、とてもこれが150年近くも前のものには見えない。紙と墨書が美しく、まるで昨日書かれたもののように見えるのである。和紙の美しさは当時の西洋人を驚かせたと言われているが、その耐久性は現代人を驚かせるものである。蓄積された伝統的な技術レベルの高さを、思い知らされる瞬間である。

(はせがわ ひろし 一般科目)

請求記号:091.22.K 登録番号:Z2001993

私と読書



岩野 優樹

「素人のように考え、玄人として実行する：問題解決の
メタ技術」 金出武雄著
PHP 研究所 2003年 ISBN4-569-62457-X
請求記号:141.5.K 登録番号:099868

何かをしようとする時にまずしなければいけないことは、「考えること」ということである。考えなしに行動して失敗した経験も多々あるだろう。そんな風に、普段何も考えずに行動している人、考えているけどなかなかうまくいかない人などは必見です。「創造力と知的体力」の鍛え方がこの本には書かれています。「自分は普段から考えているから関係ない」という人も要注意です。知識や経験があるだけに、できることできないこと・うまくいくこといかないことが瞬時に判断できてしまい、行動パターンやアイデアの幅が非常に狭くなっているかもしれません。毎年同じようなアイデアになる・プレースタイルがワンパターンになる等、逆に経験が足を引っ張ることもあるわけです。表題の「素人のように考え、玄人として実行する」ことが自分の幅を広げるヒントです。将来、研究者として巣立っていく高専の学生さんには、是非一度読んで欲しい一冊です。

(いわの ゆうき 機械工学科)

BOOK *BOOK* *BOOK*

私と読書



川島 朋子

「晩年の子供」 山田詠美著
講談社 1994年 ISBN4-06-185829-7
請求記号:913.6.Y 登録番号:099854

国語教員とはいえ、専攻が古典文学であるため、というのは言い訳にすぎないかもしれないが、近・現代小説の読書量は極めて少ない。そんな私がかつて教育実習の際にご指導いただいた先生は、現代文学を専門とされていた。ある現代文の時間、国語の教科書を離れて先生が音読されたのが、山田詠美の『晩年の子供』だったのである。山田詠美というと少々過激なイメージもあるかもしれないが、こうした少年少女の微妙で繊細な心理を描いた作品は秀逸である。私は当時これをきっかけとして、一気に山田詠美の小説を読み尽くした。おそらく最初に耳から入ってきたということも、作品の魅力に取り付かれる大きな要因であったと思う。私は残念ながら、授業中に読み聞かされるほどの朗読の技術を持ち合わせていないが、かつては読書と言えば音読が基本だったのだ。たまには声に出して、言葉の響きや美しさと共に作品世界を味わってみるのも良いかもしれない。

(かわしま ともこ 一般科目)



自 著 紹 介

堀 桂太郎

「オペアンプの基礎マスター」

電気書院 2006年 ISBN4-485-61001-2

請求記号:549.34.H 登録番号:Z2000966

オペアンプ（演算増幅器）は、理想的な増幅器に近い特性を持った高性能なICです。このICを抜きにして、実用的な電子回路は成り立たないと言っても過言ではないでしょう。つまり、オペアンプの基礎や応用を学ぶことは、同時に多くの電子回路について学ぶことにもなります。本書は、はじめてオペアンプについて学ぼうとしている学生や技術者を対象にした解説書であり、次の特徴があります。

- ・多くの図や写真を用いて、わかり易い説明を心がけました。
- ・ユニークなイラストを多用して、読者が楽しく学んでいけるように工夫しました。
- ・難しくならないように注意しながら、動作原理の数学的な裏付けを試みました。
- ・各章の終わりに「実験しよう」の節を設けました。

本書では、愉快的な児童の家族がナビゲータを務めます。イラストを楽しみながら、オペアンプの基礎や応用をマスターして頂ければ幸いです。

（ほり けいたろう 電気情報工学科）

わたしのおすすめ本

『大江戸えころじー事情 / 石川英輔著』

都市システム工学科5年 田中 雅之

日本の江戸時代は、現代社会が目指すべきゼロエミッションの社会を実現しており、ある意味では現代の日本よりも優れた時代であった。しかし、日常での人々の苦勞によってそれは実現しており、便利さでは現代社会の足元にも及ばない。

現代の文明に江戸時代の知恵を織り込むことが、環境問題解決への糸口となるかもしれない。

（講談社 2003年 請求記号:210.5.1 登録番号:099273）



『日本人の法意識 / 川島武宜著』

都市システム工学科5年 本田 将人

二十一世紀を迎えて5、6年、民主主義社会を生き、誰もそれを疑うことのない我々の日本社会において、法とはどのような役割を果たすのか。我々は未だに古き時代の主従関係、甘えを許す横の関係というような意識の中に生きている。

本来、法とは国家からの侵害を防ぎ、対等な個人間での契約が確実に行為されるために存在している。このような「法の精神」を日本は社会に適用させているのかを、西洋社会と比較している点が面白い。

（岩波書店 1967年 請求記号:320.4.K 登録番号:011391）



『恋愛写真：もうひとつの物語 / 市川拓司著』

建築学科 4年 檜原 郁美

恋をすると、少女の体から女性らしい体になることを引き換えに死んでしまう運命である主人公。しかし、そんな少女も大学で心の美しい地味な少年に片想いをする。少女の殻を破ると共に、恋愛のうまうまいかぬがゆさを感じる。一生懸命に恋をする主人公は何よりも美しく、人間のあるべき姿ではないかと思う。

“恋をすると死んでしまう”というありえないストーリーが、どこにでもあるような情景の中で繰り返されるこの物語は自分自身とシンクロし、自然と涙がこぼれてきています。

リアルな人間関係と平凡な生活が共感しやすく、自然と物語の中に入り込めるのではないのでしょうか？

(小学館 2003年 請求記号:913.6.I 登録番号:098544)



『ニシノユキヒコの恋と冒険 / 川上弘美著』

建築学科 4年 角田志帆子

川上弘美の本は、いつも独特の空間と味をもっている。この本はともピターでコクの深い、上質なチョコレートケーキの味がする。

私はゆっくりと時間をかけ、ちょっとずつ、ちょっとずつ、フォークですくって食べる。口のなかで、チョコレートの深い苦みとどっしりとした甘みがひろがる。私は舌の上で、心ゆくまでゆっくりと、その味を堪能する。その時間は、過ぎ行く一日の時の中で、何とも言えない極上のひとときとなる。そんな不思議な物語である。

(新潮社 2003年 請求記号:913.6.K 登録番号:099764)



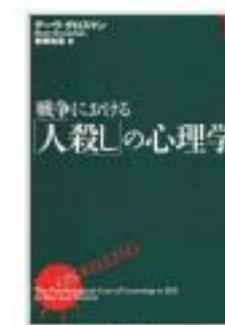
『戦争における「人殺し」の心理学 / デーヴ・グロスマン著』

機械工学科 2年 藤本 裕介

本来、人が人を殺すには(一部の異常者を除いて)強烈な抵抗感があるそうです。本書では陸軍兵が人を殺すときの心理、そして抵抗を取り除く為の、軍が行っている訓練方法が載っています。その方法とは、「パブロフの犬」のように、人間の的を見たら撃つという動作を何回も繰り返して条件付けを行うことです。

敵の飛行機や軍艦を撃ち落として戦う空、海軍と比べ、敵兵士が自分の撃った弾によって倒れていくのを目の当たりにする陸軍は非常に辛い思いをしているのではないかと思いました。歴史の教科書には「何年に戦争が起こった」とか国家間のやりとりは良く書かれていますが、実際に戦争にかり出される兵士の視点から見た記事はあまり充実してないと思います。この本を読むと戦場で死を間近に感じている軍人の事を良く知ることができると思います。

(筑摩書房 2004年 請求記号:368.6.D 登録番号:099643)



【平成17年度に購入希望は62件あり、62冊の図書を購入しました。】



図書館と私

前田 良昭

定年退職すれば「晴耕雨読」で過ごしたいとの夢を語る方も多いが、私の場合は、正直なところ本を読むことがそんなに好きな方ではない。どちらかという必要に迫られて読んできた、読まされてきたというところであるから、図書館からの原稿依頼はある意味ミスマッチ、相手を間違えたというところだ。ただし、本(読書)についてではなく図書館についてであれば多少は書けるかなと執筆を引き受けた。

私が初めて図書館(室)と出会ったのは小学校の高学年のことと記憶している。多分、大掃除の割り当て場所になったのがきっかけで図書館を知った。大きな木造の別棟に周りを背の高い書架で囲まれて大きな閲覧机が十数脚あったように思う。貸し出しカウンターがあったのか否か記憶にないのは、本を借りて読むというのではなく専らそこで閲覧するという利用しかしなかったからであろう。当時、理科が好きだった私は宇宙のことが知りたくて放課後よく図書館で色々な本を探しては時間を過ごした。太陽系や銀河系の存在を知ると、その外側には何が?と疑問はどんどん膨らんだが、明確に答えてくれる本は見当たらなかった。小さな頭で色々考えていると、いつも最後には「一体自分は何処にいるのだろうか?」という問に行き当たって奈落に落ちた。周りが真っ暗になり図書館の床がガラガラ崩れていく恐ろしい経験を何度かした。あまりに恐ろしいので、トラウマから以降この問を発することから逃げてきたが、今もこの問の解答が得られた訳ではない。

中学は校舎が新設中で図書室もなかったのも、次に図書館を利用したのは高校に進学してからである。初代校長の名を付けた教会の建物のようなクラシックな図書館があった。高い天井の閲覧室と所蔵庫が別になった形式で閲覧室にも昭和初期のような落ち着いた雰囲気漂っていた。高1の秋頃から毎日放課後に閲覧室へ通うようになったが、読書のために通った訳ではない。数学の成績が思わしくなく自分でもなんとかしなくてはと思っていた。当時、高校に隣接する教師宿舎で開かれていた数学塾や英語塾が人気で友人の何名かも通っていたが、自校の生徒相手のアルバイトを公然とやる教師に釈然としない気持ちと反発を感じたので、有名なチャート式の問題集を買い全問の解答に自力で取り組むことにした。とは言え、自宅で一人では三日坊主に終わるのが予想されたので図書館を利用することにした。静かな落ち着いた雰囲気の中で下校のベルが鳴るまで毎日1年以上過ごした結果、何とか数学に自信が持てるようになった。時折、気分転換に書庫に入ったが、あの独特の本の臭いを今も思い出す。

大学、特に研究を始めてからの図書館との付き合いは主に研究論文調査を通してである。神戸大学工学部、大阪大学基礎工学部・工学部図書館には文献複写などでよくお世話になった。薄暗い書庫で膨大な蔵書から何時間も文献を探した日々を思い出す。

明石高専図書館には在職中より退職後の方が足を運ぶことが多くなった。在職中は居室に通りの専門書があったが、自宅にはさほどの収納スペースがなく退職時に大部分を返却あるいは処分したためである。最近是一般利用者の姿も時折見かける。近くに西部図書館もあるが、技術に特化した図書館として地域に役立つ施設になって欲しい。決して現状を良しとすることなく特色のある図書館を目指して欲しい。AVスペースは特色の一つだがカウンターから死角になった現状はあまり好ましいとは思えない。開架蔵書スペースの増加などと共に施設設備の改修も必要であろう。

(まえだ よしあき 名誉教授)

平成18年度『読書感想文コンクール』入賞作品

『富嶽百景』

最優秀賞 都市システム工学科2年 泉 佳甫

私が『富嶽百景』を手にとったきっかけは、『走れメロス』『斜陽』『人間失格』この太宰治の作品と中学時代に出会ったからであった。走れメロスは、ヒーローとして描かれるメロスの描写と共に、明るいイメージを持った。それに比べ人間失格は、作者の遺書とも感じられ、麻薬や心中など、死に近く暗いイメージを持った。今思い出しても、作品それぞれのどこに魅かれたのか、うまく表すことはできないが一気に読みきったことを覚えている。『富嶽百景』も私にとってはそうだった。太宰治の作品はなぜか私を魅きつける。もしかすると普通とは違った視点で描かれる特徴的な描写に魅かれているのかもしれない。



私が実際に富士山を見たのは、遠くから、それも電車の中からだった。しかし、日本の山といえば富士山であり、その姿は容易に想像できる。頂の方が白く麓の方へ行くほど深い藍。横へ長く広がる山だ。世界一のヒマラヤ山脈などとは比べ物にもならないくらい低い。「富士山」と聞くと、美しく壮大なイメージを思い浮かべる。だから、作者が富士山を否定した時は少なからずショックを受けた。日本人で、富士山を最初から否定してかかる人はそういない。作者は作中で、「俗な山」「月見草がよく似合う」そういった具合に富士の評価を下げている。私には作者の気持ちが理解できなかったが、何度も読んでいくうちに逆なのではないかと思えるようになった。

私達は「富士山は美しい」と思って富士山を見る。そして「ああ、きれいだなあ。」と感じる。そこには新しい発見も、感動も何もない。しかし作者は、富士山を否定しながらも、いくつもの角度から富士山を眺め、時には涙を流している。嫌いだと言うが、よく見ていると思う。私は、その一つ一つの角度から見られる富士山の描写を面白いと感じ、また、「なるほど「百景」だ。」と思った。この小説の中のたくさんの人物、井伏氏、茶店の人、老婆、娘さんと母など、それぞれがいろいろな表情を持っていて、人もまた「百景」なのだと感じた。作者は、最初に否定してかかることによって、富士山の中に様々な表情を見出したのだろう。そして、その内面的な本当の美しさを見つけられ、「よくやっている」「ありがたかった」「お世話になりました」そんなふうに言葉に出したのだろうと思う。反面、富士に妥協しかけたり、赤いケシの花は富士の前ではとても映えて見えると思うが、そこで笑ってしまう「私」、そして、カメラのアングルをずらす様子、青年たちとの会話、気取ってみたり、雪が降らなければ富士はダメだと娘さんに教えるところなど、どこか少しひねくれている感じがするのはなぜだろうか。作中で少しだけ触れられていた、作者の苦悩。私には、それが原因だと思えた。

作者は、美しいものを求めている。人の性格の美しさや辺りの景色の美しさ、富士山の本当の美しさ、たくさんの人物との交流の中でそれらが見えてくる。素朴に自然に伝わってきた。また、小説の中の富士山が角度を変えるたびに「私」も変わっているように思った。そして、茶店のおかみさんや娘さん、先輩たちの親切に、人の心の暖かさを知り、また、結婚というスタートラインに立つ「私」。私はこの小説から、明るい未来への希望を感じ取れた。

（「富嶽百景・走れメロス:他八篇/太宰治作」 岩波書店 1999年
請求記号:IW.二.38 登録番号:099974）

『幸福に生きる権利は、みんな同じ』

優秀賞 都市システム工学科4年 野村麻利恵

私達は、幸せになるために生まれてきたのだ。しかし、なぜそれが他人によって侵害されなくてはならないのだろうか。また「健全者」や「障害者」という言葉を使って、なぜ人が人を区別しようとするのだろうか。

私はこの夏、「きいちゃん」という本を読んで、やり切れない思いでいっぱいになった。そして、このような事に触れずに過ごしてきた自分を恥じた。

当時彼女は、養護学校の宿舎に入って訓練を受けている、手足の不自由な高校生だった。実は私も、中学卒業と同時に住み慣れた実家を出た。今は学寮で生活を送っているが、ふと寂しさや不安を感じる時がある。そんな時はいつも、自分の進路選択が正しかった事を再確認する。そして、気持ちよく送り出してくれた家族、また今まで、いや今現在も私に関わってくれている人達がいる事に感謝するのだ。ひょっとすると、これは単なる孤独を紛らわすための儀式だ、と一笑に付されてしまうかもしれない。が、私は自分ひとりでは生きていけないのだと実感している。

私達は、今の自分の体が当たり前だと思っているせいか、自分と異なる個性を持った人を思いやる余裕はない。まして彼女たちがどんな苦しい訓練に耐えているのかなど想像した事もないだろう。実際、この私も交通事故にあうまでは、正直言ってそうだった。松葉杖を使用した期間、ほんの数センチの段差に幾度も苦しめられたのだ。

近年、ノーマライゼーションやユニバーサルデザインという言葉をよく耳にするが、まだまだ全ての人が生活しやすい環境になっていないのが現状だ。見渡せば、町は車社会となり、道路のいたるところに陸橋がある。信号機のほとんどはメロディーが流れておらず、展示ブロックなどは駐輪所化してしまっている。また職員不在の駅も多く、エスカレーターはあっても、車椅子で利用できるエレベーターのない所もある。これでは社会参加もままならず、ますます孤独の一途をたどるばかりだ。見せ掛けの、形ばかりの縦の福祉にとどまらないためにも、私達は心の中で線を引かず、横に並び、共に手をつないで生きていける、そんな社会を作っていかなければならないと思った。

きいちゃんが、お姉さんの結婚式に間に合うように作ったゆかた。私は、その一針一針に、彼女からのメッセージが込められている事に気づいた。そして、今、自分にできる事は何かと問いかけ、行動に移した彼女を見習いたいとも思ったのだ。

現代の能力・成果主義の陰で、幾多の人が悲観的になり殻に閉じこもっていることか。ややもすると、障害があるがゆえに、必死で身内を隠そうとする人達、遺伝という言葉をも口にして、恋人から去っていった人達、自分の幸せを願うという事は、他人の幸せも願うことと同じはずなのに……。誤った認識は、人も自分も不幸にするというのに……。それをいつまでも改めようとしなから、次代に受け継がれていく破目になるのだ。世の中で役に立たない人など、一人もいない。いろんな人が、自分を必要としてくれている事を忘れてはならないのだ。だから、声を大にして言いたい。自ら命を絶ってはいけないのだと。この私も微力ながら、土木の世界で、かなわぬほどの大きな夢と希望を持って学んでいる。そして、そのために努力しようとする自分が好きだ。

この本は、ほんの三十ページほどの話であったが、私の閉じかけていた心の扉を開いてくれた。生意気だが、自分の事は自分でしよう、助けが必要な時は、声に出そう。もし、そんな声を耳にしたならば、さっと体の動かせる社会の一員になりたいと思った。今、私も「生んでくれてありがとう」大声で叫んでみたくなった。

(「きいちゃん」/山元加津子著) アリス館 1999年
請求記号:913.8.Y 登録番号:099980)



『身近な外国語』

優良賞 都市システム工学科4年 末澤久里子

私は二年ほど前から手話を勉強しており、木村晴美、市田泰弘著の「初めての手話」という本は手話学習者にはぜひ薦めたい一冊である。なぜかという、この本は今まで注目されることの無かった日本手話について言語学的な研究を行い、文法などの理論的な説明を用いた画期的な手話学習本であるからだ。



手話には日本語と同じ文法の日本語対应手話と、日本語と文法が異なりろう者の生み出した日本手話がある。日本手話が注目されてこなかったのは、聴者のろう者への差別などが関係していると考えられる。私がこの本を読むことにより日本手話の重要性を知ると同時に日本手話をろう者から教えてもらうきっかけにもなった。当初、日本語対应手話しか知らなかった私にとって、日本手話は日本語と語順が異なったり、独特の慣用語があったりして実際に使い読み取るとはかなり難しく感じた。しかしこの本を読むにつれてろう者の表す日本手話の文法をより理論的に理解することができ、だんだんスムーズに会話できるようになった。

この本の内容でまず驚いたことは日本手話には非手指動作という口形、眉の上げ下げ、まばたきなどがあり、それがアクセントや過去形、進行形、疑問形などを表しているということである。私は今までろう者の手ばかり見ており手話は手で表す物だと思っていた。しかしこのような要素があることによって短時間でも長い文章を表すことができたり、同じ単語を表していても手以外の動作によっては違う意味になったりすることがあることを知った。また文章中の個々の単語を独立して表すのではなく、つなげて表す音韻という手法があることも知った。幾つかの外国語では単語を繋げて発音することを英語で連音、フランス語ではリエゾンと言うように、日本手話には日本語には無いが外国語には存在するような文法があることを知り非常に興味深く思った。

このような文法事項のほかにもろう者が日本手話と共に培ってきたろう文化についても触れてある。ろう者は人を呼ぶ時に机をたたいたり、話し相手に指を指したりし、このようなことを聴者は不快に思うかもしれない。しかしこれはろう文化と言われ、ろう者が手話という言語を共有することにより培ってきたものである。ろう者と交流する時には手話だけでなくろう文化と言う異文化があることも認識し、それを尊重することが大切であると感じた。

このようなろう者独特の言語やろう文化に対する研究は欧米では昔から盛んに行われていたが、日本では最近始まったばかりである。また日本では聴者が日本手話、ろう文化を尊重せず、ろう者に日本語、聴者の文化を強いていたため、ろう者でも日本手話、ろう文化を知らない人が増えていると思う。そして彼らがこれらの独自の言語や文化を持っていないことにより、ろう者の思春期におけるアイデンティティー形勢に悪影響を及ぼすという研究結果も多々ある。

日本には外国人が少ないと思っている日本人は多いと思う。しかしそれは気付いていないだけですぐ近くに聴者と異なった言語、文化を持つろう者がいる。今は国際社会のためどんどん外国の文化や言語に触れる機会が増えている。しかしそれに捕われる前に、まず自分のごく身近に、昔から存在するにもかかわらず今まで注目されることの無かった日本手話、ろう文化があることに気付くべきではないだろうか。

（「はじめての手話 / 木村晴美著ほか」 日本文芸社 1995年
請求記号:378.28.K 登録番号:099981）

『死刑制度について』

特別賞 都市システム工学科3年 森本 恵

この死刑執行人の苦悩を読んで、私の死刑に対する関心度は高まり、大幅な意見の変わり様を見せた。死刑については、社会科の授業で学んだ程度の知識しか持ち合わせていなかった。そして、その時点では、死刑制度賛成であった。加害者は、被害者への行為を反省することはもちろん、その罪の大きさによっては、命をかけてでも償わなければならない場合もあるはずであると考えていた。しかし、本書を通じて様々な事実を目の当たりにしたら無条件に賛成することが難しくなった。無知であった私に、本書は「死刑」を様々な角度から見せてくれた。死刑執行までの順序や手順、死刑の仕方や仕掛け、死刑囚の思い、そして死刑執行人の苦悩。他にも事実であることを認めたくない様な驚きの現実があった。九章からなる本書は、一章ずつ違う死刑執行人たちの経験を取材リポートしたものであるが、彼らは一つの共通の思いを抱いている。それは、「後悔」である。その後悔は、死刑執行という名の暗く重い過去によっていつまでも抱かせているのである。彼らにとって、死刑執行は人生の中で最も思い出したくないが、いつまでも忘れられない鎖なのである。



(C) 角川書店

死刑執行は死刑囚にも刑務官にも当日伝えられえらという。その時に命じられる刑務官は三名。首に縄をかける役と、膝を紐で縛る役、そしてハンドルを引く役である。この三名により、死刑執行という名の公的な殺人が行なわれるのである。それは仕事だとしても、義務だとしても、割り切れない。自分の汚れた手に深い悲しみを持ち、一生背負っていかなければならない事実となる。

死刑囚について書かれたものは数多い。また、遺族の手記などもたくさん存在する。しかし、刑務官、特に死刑執行人について本当のことが書かれた書物は極端に少ない。それ以前に、法廷での死刑判決から、執行までの経緯はほとんど報道されない。日本は死刑をくさいものとして、すぐに蓋をしてしまうのだ。

私は本書により、死刑執行人の存在を改めて認知した。そして、死刑そのもののあり方を深く考えるようになった。この一冊だけでも執行人の辛さや苦悩を感じることができた。もっと多くの人が読み、死刑や執行人について考えるべきである。

死刑囚といえども、命の重さにかわりはない。確かに、加害者によって殺される死と、刑の執行よっての死を同次元で考えるのは短絡的すぎるかもしれない。しかし、その命にどんな過去があっても、精一杯の命を摘み取ることはできないのではないか。一生をかけて、償うべきではないか。加害者を死刑に処したからといって、事件は終わらない。被害者遺族の悲しみが消えるわけではない。死刑を極刑ととらえ、公的な殺人を望むことも、短絡的ではないかと思う。被害者の悔しさや憎しみを無視するわけではない。殺してやりたいというのが本音であることもわかる。しかし、命の大切さ、せつなさを一番理解しているはずの被害者遺族の人々だからこそ死刑に対して考えていかなければならないのではないか。

死刑制度廃止は時間の問題であり、そう遠くない未来、廃絶されるものだと言われている。現に、いわゆる先進国ではほとんどの国が死刑を廃止しており、世界的に死刑制度は廃止の流れである。世界が同調するから日本も同調するべきだというわけではないが、日本も死刑に対する答えを出す時が迫っているのではないだろうか。そのためには、多くの人が関心を持つべきだ。死刑は違う次元の話ではない。実際に日本でおこっているのだ。私たちは、現実を見て、今の死刑制度のあり方を確認し、そこから命の尊さを思い、日々を生きなければならない。

(「死刑執行人の苦悩 / 大塚公子著」 角川書店 1993年
請求記号:326.41.0 登録番号:099975)

学生用推薦図書・雑誌

推薦図書コーナーに配架しています。(以下、抜粋)

機械工学科推薦

- 534.5.S 油空圧便覧 新版 / 日本油空圧学会編
534.5.K 油圧制御システム / 小波倭文朗ほか
雑誌 「日経ものづくり」



電気情報工学科推薦

- 雑誌 「OHM」
雑誌 「日経リナックス」
雑誌 「トランジスタ技術」

都市システム工学科推薦

- 501.34.Y 構造力学を学ぶ 基礎編・応用編 / 米田昌弘
516.0.N 鉄道線路のはなし 新訂 / 西野保行
681.8.M 地域交通の未来 ひと・みち・まちの新たな絆 / 森野美德
511.77.K プレストレストコンクリート技術とその応用 / 小林和夫ほか
369.31.K 雪国を襲った大地震 新潟県中越地震に学ぶ / 恒文社新潟支社編
656.5.T 地質・砂防・土木技術者 / 研究者のための土砂流出現象と土砂害対策 / 高橋保
511.34.D 知っておきたい斜面のはなし Q&A 斜面と暮らす / 土木学会地盤工学委員会

建築学科推薦

- 524.1.T 建築構造の力学 1 / 寺本隆幸
524.1.T 建築骨組の力学 基礎編・演習編 / 田中尚ほか
525.1.F 建築のかたちと空間をデザインする / フランシス D. K. チンほか
520.2.N 図説建築の歴史 西洋・日本・近代 / 西田雅嗣ほか
521.0.O 日本建築様式史 カラー版 / 太田博太郎
523.0.J 図説西洋建築史 / 陣内秀信ほか
523.06.E 言葉と建築 語彙体系としてのモダニズム / エイドリアン・フォーティーほか
520.2.J 建築の歴史 世界の名建築の壮大な美とドラマ / ジョナサン・グランシーほか

一般科目推薦

- 810.4.M 日本人の発想、日本語の表現 「私」の立場がことばを決める / 森田良行
813.1.M 基礎日本語辞典 第九版 / 森田良行
108.0.W 論理学 3訂版 / W.C. サモンほか
312.1.T 図解でわかる日本の政治 第3版 / 土屋和恵ほか
410.0.A 初等離散数学 / 秋山仁ほか
780.36.S 最新スポーツルール百科 2006 illustrated sports rules / 大修館書店編集
437.0.A キーノート有機化学 / Andrew F. Parsons ほか
雑誌 「CNN English Express」
雑誌 「大学への数学」
雑誌 「ロボコンマガジン」

詳しくは、図書館 HP (<http://www.akashi.ac.jp/lib/siryousuisen06.htm>) をご覧ください。

利用ランキング 2005.10.1-2006.9.30

図書 -

- 13回 「電磁気学の考え方 物理の考え方」
- 13回 「コンクリートなぜなぜおもしろ読本」
- 12回 「博士の愛した数式」
- 12回 「反自殺クラブ 池袋ウエストゲートパーク」
- 12回 「土質試験の方法と解説」
- 11回 「エース建設構造材料」
- 11回 「TOEIC テスト文法 1000」
- 11回 「線型代数」
- 11回 「土木材料コンクリート」
- 11回 「新編高専の化学 第2版」
- 11回 「模型スターリングエンジン」
- 10回 「4 TEEN フォーティーン」

- DVD -

- 26回 『Mr. & Mrs. Smith』
- 21回 『パイレーツ・オブ・カリビアン』
- 19回 『宇宙戦争』
- 14回 『オ・シャンズ11』
- 14回 『チャーリーとチョコレート工場』
- 13回 『オペラ座の怪人』
- 10回 『ターミナル』
- 9回 『X-men2 Xメン2』
- 9回 『トリック 劇場版』

- 雑誌 -

「新建築」 「新建築 住宅特集」 「A+U 建築と都市」 「住宅建築」 「建築文化」

図書館利用状況 (平成13年度から平成17年度)

図書館利用状況調 (平成13 - 17年度)

項目 / 年度		13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	
年間	入館者数	時間内	55,415	59,971	52,295	54,993	44,711
		時間外	14,585	14,691	12,612	13,749	11,724
		計	70,000	74,662	64,907	68,742	56,435
	AVルーム	計	5,314	4,331	4,891	3,948	3,987
	貸出者数	計	4,091	4,637	3,782	4,083	4,140
	貸出冊数	計	7,844	8,419	7,598	8,419	7,850
	開館日数	年間	278	260	276	281	286
一日平均	入館者数(時間内)	199	230	220	196	183	
	入館者数(時間外)	52	72	55	60	50	
	AVルーム	19	16	18	14	14	
	貸出者数	15	18	14	15	14	
	貸出冊数	28	33	28	28	27	

【開館時間】 時間内：平日 8:30～17:00 時間外：平日 17:00～20:00 土曜日 10:00～16:30

海外図書館事情

Peckham Library in London

大塚 毅彦

私は 2006 年 3 月末から在外研究員として、ロンドンにある英国王立芸術大学のヘレンハムリサーチセンターでインクルージブデザイン（ユニバーサルデザインと類似したコンセプト）の研究をしています（<http://www.hhrc.rca.ac.uk>）。情報環境の急激な変化は、英国でも「地域の図書館の新しい役割とは何か？」について様々な問題提起がなされました。90 年代後半には、図書館の利用率が毎年 2% ずつ低下しているという状況にありました。こうした状況に対し 98 年イギリス政府は、幼児教育からスタートする生涯学習、社会活動に参加するために市民に情報提供、経済、技術修得、雇用などビジネス活性化、コミュニティーの歴史を保存し共同社会意識の構築、国立デジタル図書館の構築などを、公共図書館の果たすサービスと位置づけました。この成功例としてこのロンドン南部・サザークにあるペッカム図書館について、紹介したいと思います。

ペッカム図書館は、貧しい地域のコミュニティー再生プロジェクトの 1 つとして Alsop Architects Ltd らによって設計されました。99 年にオープンし、英国で権威あるスターリング賞を受賞しています。1 階はコミュニティー・インフォメーションセンター、2 階はマルチメディアセンター、3 階は図書館、4 階はミーティングルーム、子供活動室があります。ポストモダンでポップアートなファザードもさることながら、様々な国々の子供や大人たちがユニークな空間の中で図書やマルチメディアを楽しんでいるようでした。「利用者間の関係性の向上」という目標の結果は年間 50 万人以上の利用者数が示しており、全ての人々を“インクルージブ(包括)”する、また訪れたいくなる図書館でした。



（おおつか たけひこ 建築学科）

【掲示板】

平成 18 年度より試行として学生の定期試験開始 1 週間前及び試験期間中の日曜・祝日に、図書館を臨時開館しております。開館時間は、土曜日と同じです。館内に 10 台の検索端末があり、インターネットを利用して情報検索が可能です。購入希望の図書や視聴覚資料などもできるだけ希望に添えるようにと思っています。図書館は一般の方へも開放しており、利用登録を行えばどなたでも利用できます。利用できる資料は、館内所蔵の図書・雑誌です。

図書館ホームページ <http://www.akashi.ac.jp/lib/index.html>

【編集後記】

図書館報第 42 号をお届けします。お忙しい中、原稿をお寄せくださった皆様ありがとうございます。本号の各記事が読者や図書館の利用に役立っていけたらと願っています。

明石工業高等専門学校図書館報 第 42 号 2006 年 12 月発行

編集・発行 明石工業高等専門学校図書館 明石市魚住町西岡 679-3(〒674-8501)(078)946-6051